

久間防衛大臣の「原爆投下はしょうがない」発言を断罪し、

改憲阻止闘争の創造的展開をかちとろう

2007年7月 長崎被爆者青年同盟

久間章生防衛大臣は6月30日、千葉県柏市の麗沢大で講演し、米帝の原爆投下について「長崎に落とされ悲惨な目に遭ったが、あれで戦争が終わったんだ」という頭の整理で、しょうがないなと思っている」と発言した。

久間発言の基底にあるものは、日帝・安倍の改憲攻撃である。

安倍は2011年の改憲を目指すと言明し、日本人民の反戦意識を根底から破壊・転覆させる攻撃を激化させてきた。南京大虐殺、日本軍慰安婦問題、沖縄戦で日本軍が住民に自決を強要した歴史のこうしたことごとくをなかったものとして否定している。特にそれは、中学・高校の教科書から日本帝国主義の戦争犯罪の歴史を書き換え抹消する攻撃として進められ、日の丸・君が代を強制し、教育基本法改悪を強行した。

日帝・安倍の改憲攻撃は、九条を破棄し、日本帝国主義が侵略と戦争に全面的に突入していこうとするものである。そして、帝国主義戦争によって不可避となる被抑圧人民、労働者階級人民の犠牲は、久間が言うように「しょうがない」ものとして甘んじて受け入れることを強要するのである。

東京大空襲などの無差別爆撃、沖縄戦などの住民大量殺戮に加えて、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆は、帝国主義の戦争被害のなかでその残虐さにおいて極限的であった。そのヒロシマ・ナガサキをどうして「原爆投下はしょうがない」と言えるのか？ アジア人民二千万人、日本人民三百十万人の戦争犠牲の歴史を、仕方がなかったなどと言えはしないのである。

久間発言に対する被爆者をはじめとする人民の弾劾がわき起こり、ついに久間は防衛大臣辞任に追い込まれた。

さらに、日帝・安倍は教育基本法改悪、国民投票法案の強行採決によって改憲攻撃を加えてきた。また、年金制度を崩壊させ、社会保険庁解体を強行し日本帝国主義の矛盾の一切を人民へと転嫁している。こうした攻撃を日帝・安倍は「戦後民主主義的議会制度」さえも破壊し、強行採決に次ぐ強行採決を繰り返した。人民の怒りと弾劾は、久間の発言のみならず、こうしたクーデター的政治に対してたたきつけられた。また、ブルジョアジーの側にも動揺が起こり、